

きたかということがはっきりとしてきた。ドイツ民族を守るごぶしは、もちろんそのころもあつた。ただそれを投入する頭がなかっただけなのだ。当時、わたしが青年にこれらの使命の必要性を説明し、さらにこの地上ではどんな知識も、それに奉仕する力が現われて、それを保護し、防衛しないならば、効果がなく、やさしい平和の女神はただ戦いの神の側へさまようものであり、この平和の大事業はすべて力の加護と援助が必要である、といつもくりかえし確信したとき、かれらが目を輝かせてわたしを見たことがなん度あったことだろう。現にどんなにはるかにいきいきとした形で、兵役義務の思想がかれらにはいりこんでいったことか！ 死せる国家の死せる権威につかえる、古い骨化した官吏根性の硬化した意味においてはなく、個々人の生命を、いつ、いかなる地位にいても、いかなる場所であつてもつねに、民族全体の存続のためにささげようとする義務をいきいきと認識してのことである。

そしてこれら青年がいかに立ちあがったことだろう！

くまばちの群のように、かれらはわれわれの集会の妨害者に、その優勢におかまいなく、襲いかかっていった。そして妨害者がどんなに強大であっても、負傷や流血の犠牲を顧慮せず、われわれの運動の神聖な使命に自由な道をきりひらくという大きな思想に、完全にみだされていた。すでに一九二〇年盛夏に、この整理隊の組織は、次第に一定の形をとってきた。そして一九二一年春には、だんだんと百人隊に編成され、それ自身がさらに分隊にわかれていった。

そしてこれは緊急に必要だった。というのは、その間に集会活動が引きつづき盛んになってきたからである。もちろんわれわれはまたこのころ、ミュンヘンのホーフプロイハウスのフェスト

ザールで集会をした。だが、町のいっそう大きな会場のほうをもっとたびたび用いた。ビュルガープロイのフェストザールやミュンヘナー・キンドル・ケラーでは、一九二〇年から二年にかけての秋と冬に、次第に強力になっていく大衆集会が行なわれ、いつも同じ情景だった。すなわち、国家社会主義ドイツ労働者党の示威大会は、当時すでにたいていは開会まえから詰めすぎるため、警察の手で閉鎖されるのだった。

統一的象徴の意義

われわれが整理隊を組織したことは、ある非常に重要な問題を明瞭にした。運動は、それまで党章も党旗ももっていなかった。そういうシンボルがないということは、ただ一時的に不利であつたばかりでなく、将来のためにもがまんできなかった。まず第一にその不利は、黨員に同じ党に属しているという外的な目印がまったくなく、それは、運動のシンボルの性格をもつてはいるが、インターナショナルなそういうものに對抗しうるような目印を欠いているということは、将来のためにも耐えられないことだった。

だが、こういうシンボルが心理的にどんな意義を与えるか、わたしはすでに青年時代に一度ならずしばしば認識し、また感情的に理解する機会をもった。さらに第一次大戦後、わたしはベルリンにおいて王宮とルストガルテン前でマルクシズムの大衆示威を体験した。赤旗、赤い腕章そして赤い花の大海が、おそらく十二万人も参加したと思われるこの示威運動に、純粹に外面的だけでも力強い勢力を与えたのだ。わたし自身、このような雄大に活動する光景からする暗示的魔力に、民衆出身の人々がいかにたやすく屈服してしまうか、ということを感じ、また理解しえた

左書
右書
赤旗
赤腕章
赤花

特別の世界観の形成
ブルジョア

のだった。

政党政治的には一般にいかなる世界観も心に浮べず、あるいは代表もしていないブルジョアジ
ーは、それゆえまた自分たちの旗をもっていないかった。かれらは「愛国者たち」からなりたつて
おり、したがってドイツ国の旗をもつてぶらついていたのである。もしこれ自体が一定の世界観
のシンボルであったならば、実際かれら自身活動によってかれらの世界観のシンボルが国家の、
そしてドイツ帝国の旗になったのだから、国家の支配者がその旗に自分たちの世界観の代表をみ
たことも、理解しうることだったろう。

だが事態は、そうならなかった。

ドイツ帝国は、ドイツ・ブルジョアジーの力添えなしに作られ、旗自体は戦争の若枝から生ま
れてたのだ。だがそれゆえ、旗は事実上単なる国旗であって、特別の世界観的使命の意味ではな
らんの意味ももっていないのである。

新旧の黒・赤・金　ただドイツ語地域のある場所で、ブルジョア政党旗のようなのがあつ
ただけだ。ドイツ・オーストリアだ。当地の国家主義的ブルジョアジーの一部は、一八四八年の
旗すなわち、黒・赤・金を、かれらの党旗に選び、一つのシンボルをつくつたので、それは世界
観的には何の意味もなかったが、それにもかかわらず国家政治的には、革命的性格をおびたもの
であった。当時、この黒・赤・金の旗の最も激しい敵は——人々はこれをいまでも決して忘れて
はならないのであるが——社会民主党であり、キリスト教社会黨員ないしカトリック黨員であつ

た。当時からが、まさしくこの旗を侮辱し、けがし、よごしたのは、これらがその後、一八一
八年に、黒・白・赤の旗を下水溝へ引きずりこんだのとまさに同じである。もちろん旧オースト
リアのドイツ諸政党の黒・赤・金は、一八四八年の色であった。このようにそのころは、幻想的
な時代であつたかも知れないが、個人人においては、たとい背後に黒幕としてのユダヤ人がかく
れていたとしても、最も真正なドイツ魂が代表として座をしめていたのである。したがって、ま
ず祖国の裏切り行為や、ドイツ民族とドイツ財宝の無恥な駆引き売りが、マルクシズムと中央党
にこの旗を非常に気に入らせたのである。すなわち、かれらはそれを今日、このうえもなく神聖
なものとして尊び、かつてはかれらがつばをはきかけたこの旗を守ろうとして自己の旗印をつく
つたのだ。

かくて、一九二〇年までは、事実上マルクシズムに対抗し、かれらの世界観的に正反對の対立
を具象化する旗はなかったのである。というのは、一九一八年以後にドイツ・ブルジョアジーは、
自分たちのよりよい政党の中に、いまとつぜん発見された黒・赤・金のドイツ国旗をかれら自身
のシンボルとして引きうけることをむしろ好都合とは考えなかったからだ。しかし人々はみずか
ら新しい発展に対して、将来のための独自のプログラムも対置することなく、最善の場合でも過
去のドイツ国の再建思想をもっていただけであつた。

新旧ドイツ国旗

そして、旧ドイツ帝国の黒・白・赤の旗が、われわれのいわゆる国家主義
的ブルジョア政党の旗として復活したのは、この思想のおかげである。

黒・白・赤

いまや名譽にならない諸状態や随伴現象のもとに、マルクシズムによって征服されてしまった状態をあらわすシンボルが、この同じマルクシズムをふたたび滅ぼしてしまふべき目印に適さないことは、明白である。この古いユニークな美しさをもつ色は、その若く新鮮な組み合わせによって、このもとで戦いそして多くの犠牲を見てきた真のドイツ人には、神聖で尊いものでなければならぬが、この旗はそれゆゑ将来の闘争のシンボルとして通用しないのである。

わたしはいつも、われわれの運動においてはブルジョア政治家とちがって、古い旗を失ったことを、ドイツ国民のためにほんとうに幸福であった、という立場をとっていた。共和国がこの国旗のもとに何をしようかと、われわれには変りはない。だが、われわれは運命が恵み深くも、すべの時代を通じてこのうえもなく名譽ある軍旗を、このうえもなく破廉恥な淫売の敷布として使われることから守ったことを、心の底から感謝しなければならぬ。自分自身と自己の市民を売った今日のドイツ国は、決して黒・白・赤の榮譽と英雄的な旗を使うことができないのだ。

十一月革命の恥辱が続くかぎり、共和国もその外被をまともによい。そしてまたより忠実な過去からその外被を盗ませないようにしよう。わがブルジョア政治家は、国民のために黒・白・赤の旗を望むものは、われわれの過去に窃盗行為を犯すものであることを、良心によびおこさなければならぬ。ありがたいことには、共和国が自己に適したものを選んだように、かつての旗は実際に、ただかつてのドイツにとってのみ完全に適合していたのである。

国家社会主義の旗

われわれ国家社会主義者がなせ旧国旗を掲揚することに、われわれの独

自の活動の意味深いシンボルを見ることができなかったか、という理由も、ここにあった。というのは、われわれは自己の失敗で没落した古いドイツ国を、ふたたび死からめざめさせることを望むのではなく、新しい国家をつくることを望んだからである。

今日、この意味でマルクシズムと闘っている運動は、だからその旗からして、疑いもなく新國家のシンボルであらねばならない。新しい旗の問題、すなわちその模様について、当時われわれは非常に頭を使った。あらゆる方面から提案された。もちろんたいはいよく考えられてはいたが、目的に適合しなかった。というのは、新しい旗はわれわれの独自の闘争のシンボルでなければならぬのと同様に、他方それは大きなブラカードのような効果もなければならぬからである。自分で大衆とさかんに接触しているものは、こうしたすべてのものが、小さく思えるがしかし非常に重要なことであることがわかつたであらう。効果の多い記章は、非常に多くの場合に、ある運動についての関心に対する最初の誘因を与えることができるのである。

こういう理由から、われわれの運動を——種々の方面から提案されたように——旧國家と、あるいはより正しくいえば、過去の状態の再現を唯一の政治目的であるとする弱い政党と、白旗によって同一視するようならゆる提案を、われわれはすべて拒否しなければならなかった。そのうえ白は感動的な色ではない。それは純潔な処女団体には合うが、革命期の革新運動には合わないのである。

また黒を提案するものもあつた。それ自体は現代に適しているが、そこにはなんらわれわれの運動の意欲の説明的表示がなかった。けっきょくこの色も感動的な効果がじゅうぶんでない。

革命期の革新運動
新しい国家をつくる

十一月革命の恥辱

白・青は、美的効果はすばらしいにもかかわらず、あるドイツの一連邦の色として、遺憾ながら評判のよくない分離主義的偏狭さという政治的立場をあらわしているものとして、問題外である。さらに人々はここでもまたわれわれの運動を表示するものを見いだすのは非常に困難である。黒・白に対しても同じことがいえた。

黒・赤・金は、もとより問題にならなかった。

また黒・白・赤は、上述した理由から、問題にならず、いずれにせよいままでの表現では問題外である。たしかに効果という点では、この色の組み合わせは他のすべてのものをこえて高くそびえている。それは現存するものの中で最も輝かしい調和である。

わたし自身は、つねにこの昔の色を残しておく考えだった。それは兵士としてのわたしにとつて、わたしの知っているかぎりの最も神聖なものであったからというだけでなく、その美的効果においてもわたしの感覚に、はるかにびつたりするものであったのだ。それにもかかわらずわたしは、当時若い運動の各方面から渡された無数の図案——そしてたいはいは古い旗の中にはハーケンクロイツを描いたものだった——を、例外なく拒否せざるをえなかった。わたし自身は——指導者として——わたし自身の図案をすぐに公にしたくなかった。とにかく他の人が、りっぱなあるいはおそらくもっとりっぱなものをもってくる可能性があったからである。實際上、シュタルンベルクのある歯科医も、かなり悪くない、そのうえわたしの図案にかなり近い図案を提出した。ただ一つ欠点があった。すなわち、かぎの湾曲したハーケンクロイツが、白い円の中にはめこまれていたものだった。

その間にわたし自身が、いろいろとやってみて最後の形を描いた。すなわち、赤地に白い円を染め抜き、その真中に黒のハーケンクロイツを描いた旗である。長い間試みた後にわたしはまた、旗の大きさと白い円の大きさと、同じくハーケンクロイツの形と太さに一定の割合をきめたのだ。

そしてそれが、最後まで残された。

同じ意味で、整理隊のための腕章もその後ただちに作図された。しかも、赤い腕章で、同じように白い円を抜き、黒いハーケンクロイツを描いたものだった。

黨員章も、同じ規準にしたがって立案された。すなわち、赤地に白い円、中央はハーケンクロイツを描いた。ミュンヘンの金細工師、フュースが、はじめて使いうる図案を作り、その後それが決定された。

一九二〇年の盛夏にはじめて、この新しい旗が公衆の前にあらわれた。それはりっぱにわれわれの若い運動に適合した。運動が若く新しかったように、旗もまた若く新しかった。それはだれもそれ以前に見たことがなく、当時、点火用の炬火のような効果があった。ある忠実な女子黨員が、はじめて図案をしあげ、旗を引きわたしたとき、われわれ自身、みんなほとんど子どものような喜びを味わった。はやくも数か月後、われわれはミュンヘンでそれを六本もっていた。そしてますます拡大する整理隊は、特にこの運動の新しいシンボルを広めるのに役立った。

国家社会主義の象徴の説明

しかもこれはまさしく一つのシンボルなのだ！ われわれみんな

人によく知られ、すでに一つの綱領としての意義をもってきた。また、支持者の群も、そのうえ
 黨員さえもたえず増加しはじめた。そのようにして、一九二〇年から二一年にかけての冬にわれ
 われは、すでにミュンヘンで強力な党として登場することができた。

当時はマルクス主義政党的をぞいては、政党はなかった。とりわけわれわれのように、こうい
 う大衆示威運動で注意を促すことができるような**国家主義的政党**はなかった。五千人を収容する
 ミュンヘナー・キンドル・ケラーは、一度ならずしばしば破れんばかりにいっぱいになった。そ
 してわれわれがまだあえて近づかないただ一つの会場があった。これがツイルクス・クローネ^(U)だ
 った。

一九二一年末、ドイツにとつてまた苦しい心配事がもちあがった。ドイツに不合理な一千億金
 マルクの支払い義務を負わせた。パリ協定が、ロンドン協約の形で実現することになったのだ。

ミュンヘンにずっと前からあったいわゆる**民族主義同盟**の協団体^(U)が、これをきつかけとして
 大々的な共同抗議に招こうとした。時は非常に切迫していた。わたし自身は、一度決定したこと
 を実行にうつすのをいつまでもちゅうちよし、ぐずぐずしているのをみていらいらしていた。は
 じめはケーニヒスブラッツで示威大会をやるといっていたが、人々は赤になぐりこまれるという
 心配からふたたびこれを中止し、そしてフェルトヘルンハレ前の抗議示威運動を計画した。だが
 さらにこれもやめ、そして最後にミュンヘナー・キンドル・ケラーで合同集会をやる^(U)と提案した。
 とかくするうちに、一日一日とたつていった。大政党は、この恐ろしいでき事にいっこうなんの
 注意もしない。協団体も、ついに計画した示威大会のはっきりした日取りをきめる決心をつけ

陰謀

禮 = 8個の礼
 2つ礼

なによって熱愛せられるこの**独得の色**によって、かつてドイツ民族のために数多くの榮譽をかち
 えたもので、ただ過去に対する畏敬の念をわれわれにおこさせるだけでなく、それはまた運動の
 意図を最もよく具体化したものだった。国家社会主義者としてわれわれは、われわれの旗の中に
 われわれの綱領を見る。われわれは赤の中に運動の社会的思想を、白の中に国家主義的思想を、
 ハーゲンクロイツの中にオリーブ人種の勝利のための闘争の使命を、そして同時にそれ自体永遠
 に反ユダヤ主義であったし、また反ユダヤ主義的であるだろう創造的な活動の思想の勝利を見る
 のだ。

二年後には——そのときにはすでに整理隊からとくに数千人を包括する突撃隊になっていた
 が——この若い世界観の防衛組織に、特別な勝利のシンボルを与えることが必要である、と思わ
 れた。すなわち、**隊旗**である。それもまたわたし自身が図案をつくり、そして古くからの忠実な
 黨員、金細工師ガールに、その仕上げをまかせた。それ以来隊旗は国家社会主義の闘争の目印に
 なり、軍旗になったのである。

*

ツイルクスの第一回集会 一九二〇年にますます盛んになってきた集会活動は、ついに毎週
 しかも二回開くまでになった。われわれのポスターに人々は群がる。町でいちばん大きい講堂は
 いつもいっぱいになる。そして誤った道に導かれた何万というマルクス主義者は、きたるべき自
 由のドイツ国の闘士となるため、民族共同体へもどる道を見いだしたのだ。ミュンヘンで公衆は、
 われわれを知った。人々はわれわれのうわさをし、「国家社会主義者」ということばが、多くの

突撃隊